

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13484

研究課題名（和文）日本語教育における副詞の効果的な指導法構築に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research for establishing an effective teaching method for adverbs in Japanese language education

研究代表者

朴 秀娟（PARK, Sooyun）

神戸大学・国際教育総合センター・講師

研究者番号：10724982

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語教育における副詞の効果的な指導法構築を目指し、その基礎的研究として、副詞指導に見られる問題点、及び日本語学習者が副詞を学習するにあたり抱えている問題の2点について明らかにすることである。これらを明らかにするため、教科書調査と学習者の産出物調査を行った。まず、教科書調査では、初級から上級までの全レベルの教科書を対象に、どのような副詞が導入されているのか、また、なかでも、取り立てて指導される副詞にはどのようなものがあるのかを調べ、それら副詞に見られる特徴を示した。次に、学習者の産出物調査では、学習者のレベル、産出物のタイプにも留意し、学習者による副詞の使用実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、副詞全般について体系的、かつ包括的な研究を行うことで、日本語教育における副詞指導に見られる特徴を示すことができただけでなく、学習者にとって産出が容易な副詞及び難しい副詞を、カテゴリー化して示すことができた。本成果は、学術的には、これまで日本語教育においてはほぼ皆無に等しかった、副詞の網羅的研究の蓄積に貢献し、さらには、副詞の習得における難易度の解明ができたことで、第二言語習得研究にも貢献ができたと考える。社会的な意義は、日本語教育の現場において、指導手順や教材開発を展開する上で、有意義な知見を与えることができることにありと考える。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research is to clarify problems in teaching methods of Japanese adverbs and also issues that Japanese language learners confront while learning Japanese adverbs. This research is positioned to become fundamental research for establishing an effective teaching method for adverbs in Japanese language education. I conducted two different kinds of investigations to achieve this goal: the first is an examination of Japanese textbooks and the second is an evaluation of the output that Japanese learners produced. In the former investigation, I examined textbooks ranging from beginner's to advanced levels to find out which kinds of adverbs are introduced and which adverbs among them are given specific focus, and indicated what characteristics these adverbs have in common. In the latter investigation, I clarified how Japanese language learners produce adverbs by paying attention to learners' proficiency levels and their adverb use in both oral and written productions.

研究分野：日本語教育

キーワード：副詞 日本語教科書 教科書分析 日本語学習者 副詞の産出 日本語教育

## 1. 研究開始当初の背景

副詞は、他の品詞に比べて定義が難しい。日本語においても、副詞はしばしば品詞の「ゴミ箱」や「はきだめ」と言われ、何を副詞とするか、また、その分類をいかにするかをめぐっては様々な見解が存在している。そのためか、副詞の研究は、副詞の分類や機能を体系的、包括的に取り上げている研究よりも、個々の副詞に関する研究が主となっている。

日本語教育における副詞研究にも同様の傾向が見られる。日本語教育の視点を取り入れた副詞の研究には、副詞の意味・機能に焦点を当てたもの、日本語教科書(以下、教科書とする)や日本語学習者(以下、学習者とする)の中間言語における副詞の特徴を分析しているもの、また、その特徴を踏まえ指導法を提案しているものなどを挙げることができる。しかし、それらの研究もやはり、従来、学習者にとって習得が難しいとされている副詞を個々に取り上げていることが多い。日本語教育の観点から副詞全般について包括的に取り扱っている研究として、大関(1993)を挙げることができるが、それ以来、日本語教育の視点から副詞全般を網羅的に取り扱っている研究は皆無に等しかった。

副詞は、話し手の気持ちを効率的に伝えることができ、円滑なコミュニケーションを行う上で重要な働きをする。例えば、問いに対する回答として、「ちょっとわかりません」や「どうしてもわかりません」を用いると、「わからない」という動詞そのものよりも、副詞「ちょっと」や「どうしても」が果たす機能の方が大きいと言える。しかしながら、日本語教育では、名詞、動詞、形容詞を中心とした文法教育が主となっており、副詞の多くは、語彙の一つとして導入されるに留まっている。学習者の産出物を見ていると、「たばこは体にとてもよくない」、「国へ帰ったらきつと会いたい」のような誤用が見られることがあるが、これらは、副詞の語彙的な意味が理解できていないというよりも、共に用いられる述語に関する理解が不足していることに起因する。このように、副詞の中には、副詞の語彙的な意味を理解しているだけでは適切に使えないものも多く存在する。また、副詞の適切な使用をめぐっては、どの学習レベルにおいても問題を抱えており、上級学習者であっても、副詞の適切な使用はそれほど容易なものではない。そう考えると、副詞の習得及び指導をめぐる問題を明らかにすることは、日本語教育において避けられない課題の一つであると言える。しかしながら、副詞研究が個々の副詞を対象としている研究を主とするために、日本語教育への応用が難しく、学習者の様々なレベルに対応した副詞教育となると、その応用がさらに難しいという現状があった。

## 2. 研究の目的

本研究では、上で述べたような状況を踏まえ、日本語教育における副詞の効果的な指導法構築につなげるための基礎的研究として、日本語教育において導入されている副詞全般を対象に、次の2点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 日本語教育における副詞指導にはどのような問題点があるのか。
- (2) 日本語学習者は、副詞を学習するにあたってどのような問題を抱えているのか。

## 3. 研究の方法

上で示した研究の目的を達成するために、それぞれ、次に示す方法を用いた。

- (1) 日本語教育における副詞指導にはどのような問題点があるのか。  
教科書調査

日本語教育における副詞指導に見られる問題点を探るべく、初級レベルから上級レベルまでのすべてのレベルの日本語教科書を対象に、どのような副詞が、どのように導入され、どのように練習が行われているのかに着目した教科書分析を行った。

- (2) 日本語学習者は、副詞を学習するにあたってどのような問題を抱えているのか。  
学習者の産出物調査

日本語学習者が副詞を習得する際に抱えている問題を明らかにするべく、学習者が、どのような副詞を、どのように使用しているのかを、正用、誤用ともに調査し、その実態を明らかにした。考察は、学習者のレベル(初級・中級・上級)、産出物のタイプ(話し言葉・書き言葉)の違いにも留意して行った。

#### 4. 研究成果

本研究では、以下のことを明らかにした。

(1) 日本語教育における副詞指導にはどのような問題点があるのか。

まず、初級教科書について、教科書 11 種(刊行年:1994~2013)を対象に、導入されている(=語彙として提示されている)副詞を調査し、大関(1993)の調査結果とも比較しつつ、副詞の導入に見られる特徴について考察を行った。その結果明らかになったことは以下のとおりである。

多くの初級教科書において共通して見られる陳述副詞は、大関(1993)の調査後においても、その多くが特定の文型とともに導入されているものである。

複数の教科書において共通して取り扱われるようになった情態副詞の種類が増えている。

共通度(=教科書間で共通して見られる程度)が高い程度副詞には変化が見られる。大関(1993)の調査時には「たいへん」だったのが、今回の調査では、「すこし、ちょっと、とても」であった。

また、副詞が導入される際の特徴として、同じ副詞であっても、教科書によって提示される際の形において、次のような違いが見られることがわかった。

副詞単独で示されることもあれば、共起しやすい他の語句とともに一つのフレーズとして提示されることもある。例)「そろそろ」/「そろそろ失礼します」

形容詞の連用形から転成し副詞として働いているものの扱いが教科書によって異なる。一つの単語として提示されている場合もあれば、そうでない場合もある。例)「すごい」「すごく」の両方を提示/「すごい」のみを提示

名詞が格助詞を伴い副詞として働いているものの扱いが教科書によって異なる。一つの単語として提示されている場合もあれば、そうでない場合もある。例)「みんなで」/「みんな」

文体差を有する副詞の扱いが教科書によって異なる。口語体として見なすこともできる副詞についても、話し言葉的であるという説明とともに導入をしている教科書がある。例)「あんまり」「とっても」

次に、全レベル(初級~上級)の教科書を対象に、導入されている副詞の中でも、特に取り立てて指導されている副詞(=学習項目(または、その一部)となっている副詞)に注目した考察を行った。考察結果は以下のとおりである。

初級教科書では、新しい文型に付随した形で、関連する副詞を対で(例)「とても/あまり」,「もう/まだ」, または一つのカテゴリーにまとめて(例)程度・量・頻度に関わる副詞)指導する傾向にある。

中級教科書になると、取り立てて指導される副詞は陳述副詞に集中し、初級教科書とは異なり、ほとんどが副詞そのものの理解に焦点が当てられたものである。

上級教科書になると、共通して取り立てて指導される副詞はほぼなくなり、取り立てて指導されていたとしても、その多くは、初級や中級の教科書においてすでに導入されている副詞である。

⑧~⑩の考察結果を通して、日本語教育における副詞指導の流れの一端についても示すことができた。

上記の研究成果は、以下において公開されている。

朴秀娟(2019)「初級日本語教科書における副詞の導入実態について」『神戸大学留学生教育研究』3、神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター留学生教育部門、pp. 21-34.

朴秀娟(2022)「日本語教科書における副詞の扱いについて」『神戸大学留学生教育研究』6、神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター留学生教育部門、pp. 23-47.

また、上記の研究を進める過程で、日本語教育、とりわけ、初級の日本語教育の現場において、教師が「たくさん勉強してください」といった表現をしばしば用いていることに気がつき、その適切さについて検討した。「たくさん勉強してください」に見られるような、動作の量を示す「たくさん」は、学習者の産出物においても観察される。動作の量を示す「たくさん」は、実際の日本語(ここでは、教室外の日本語)や教科書ではほとんど用いられていないことから、教師による語彙の使用が学習者の産出物にも影響を与えている可能性があることを指摘した。本成果は、以下において発表した。

朴秀娟(2020)『日本語教育における「たくさん勉強してください」の使用をめぐって』『AATJ 2020 Annual Spring Conference』American Association of Teachers of Japanese, Sheraton Boston Hotel (米国)

(2) 日本語学習者は、副詞を学習するにあたってどのような問題を抱えているのか。

上級学習者になっても初級で導入される副詞の誤用が依然として観察されることに注目し、まずは、初級レベルで導入される副詞について、学習者による使用実態を明らかにした。結果を以下に示す。なお、データは、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス(Ver.6)』(日本語誤用と日本語教育学会)において副詞の誤用としてタグづけがされていたものを用いている。

学習者に見られる副詞の誤用は、旧日本語能力試験の4級相当のもの、すなわち、初級レベルで導入されるものが過半数を占める。

初級レベルで導入される副詞の誤用は、上級学習者においても観察される。

意味・機能に関する理解が不足していることに起因すると思われる誤用、用いられる文章のスタイル(文体)に関する理解が不足していることに起因すると思われる誤用が、特に上級学習者において多く見られる。

次に、上に述べた調査結果は、中国語を母語とする学習者による書き言葉を対象とした調査であったため、学習者の母語や文体の違いにも着目した調査を行った。具体的には、中国語、英語、韓国語を母語とする学習者によって産出された話し言葉と書き言葉を対象に、学習者による副詞の使用実態を明らかにした。また、同じ条件のもとで収集された日本語母語話者(以下、母語話者とする)による産出物に見られる副詞とも比較を行い、学習者にとって産出が難しいタイプの副詞についても明らかにした。なお、調査に用いたデータは、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(国立国語研究所)の「ストーリーテリング」と「ストーリーライティング」のデータであり、データの多くを占めていた中級学習者に絞って考察を行っている。考察の結果、中級学習者の産出物に見られる副詞には次のような特徴があることがわかった。

産出される副詞のバリエーションが少ない。

主観を表す副詞の産出は難しく、産出に十分な時間が与えられても 示した傾向は変わらない。

話す内容に関係なく初級で学んだ特定の副詞を多用する傾向がある。

母語によっては副詞の産出がより少なくなることがある。

このうち、の結果は、話し言葉と書き言葉の比較調査から得られた結果である。話し言葉であっても書き言葉であっても副詞の産出に見られる特徴は変わらなかった。そこで、話し言葉に限定し、これらの結果が、データのタイプや学習者のレベルが変わってきても同様の結果となるのかを検証すべく、学習者のインタビューデータが収録されている『タグ付き KY コーパス』を用いて、初級から上級学習者による副詞の使用実態を調べた。その結果、次のようなことが明らかになった。

日本語能力を問わず、初級で導入される副詞が多用される傾向にある。

日本語能力が上がるにつれて、中級以降で導入される副詞の使用も見られるようになる。ただし、一部のものに限定される。

程度・量に関わる副詞、時に関わる副詞は産出されやすい。

叙法に関わる副詞は産出されにくい傾向にある。

①～⑪の結果から、学習者によって使用される副詞は、バリエーションが少なく、初級で導入される副詞に集中していること、母語やレベルに関係なく、話し手の主観を表す副詞の産出は難しいといった傾向を読み取ることができた。

上記の研究成果は、以下において公開されている。

朴秀娟(2017)『初級日本語教育において導入される副詞の使用実態 中国人日本語学習者を例に』『2017年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム』日本語誤用と日本語教育研究会、湖南大学(中国)

朴秀娟(2019)『中級日本語学習者によるストーリーテリングに見られる副詞の特徴』『日本語/日本語教育研究会 第11回大会』日本語/日本語教育研究会、学習院大学

朴秀娟(2019)『日本語学習者の副詞の使用状況』『2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム』日本語誤用と日本語教育学会、中国人民大学(中国)

朴秀娟(2020)『中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴 ストーリーテリングを中心に』『日本語/日本語教育研究』11、ココ出版、pp.19-34.

朴秀娟(2021)『話し言葉における日本語学習者の副詞の使用に見られる特徴』『日語偏誤与日语

(1)(2)と直接には関係しないが、本研究期間中、副詞及びそれと関連する要素、また、学習者の産出物と関連して次のような論考も発表した。

- 于康・林璋・于一樂・朴秀娟・朴麗華・楊曉敏・呂雷寧・杉村泰・彭廣陸・董xin(金を3つ)・林春・張威・王忻・劉鳳榮・彭玉全・徐微潔・金稀玉・陶魏青・王閏梅・鐘勇・陳慧玲・陳玲・王怡・多田美有紀(2017)『日語偏誤与日語教学研究叢書 第2卷 日語格助詞的偏誤研究:中』浙江工商大学出版社
- 于康・林璋・張佩霞・高永茂・呂芳・向坂卓也・徐愛紅・高山弘子・彭廣陸・于一樂・朴秀娟・黃毅燕・蘇鷹・野村登美子・母育新・陳昌柏・裴麗・肥田栞奈(2018)『日語偏誤与日語教学研究叢書 第3卷 日語格助詞的偏誤研究:下』浙江工商大学出版社
- 朴秀娟(2018)『現代日本語における副詞「あくまで(も)」の意味・用法』『韓国日本語学会 第38回 国際学術発表大会』韓国日本語学会、中央大学校(韓国)
- 堤良一・朴秀娟(2019)『裸の助詞の出現可能性に関する日韓の相違について』『韓国日本語学会 第39回 国際学術発表大会』韓国日本語学会、明知専門大学校(韓国)
- 鄭相哲・朴秀娟(2019)『韓日冠形節の時相法に関する研究(原題は韓国語)』『国際ワークショップ「北東ユーラシア諸言語の記述と対照3」』新潟大学
- 朴秀娟・鄭相哲(2019)『相対テンスの指導法について 時間を表す従属節を中心に』『韓国日本語学会 第40回 国際学術発表大会』韓国日本語学会、聖潔大学校(韓国)
- 朴秀娟(2020)『副詞あくまで(も)の意味・用法の変遷』于一樂・江口清子・木戸康人・眞野美穂(編)『統語構造と語彙の多角的研究 岸本秀樹教授還暦記念論文集』、開拓社、pp.260-273
- 鄭相哲・金美廷・金秀珍・董素賢・柳昞希・朴秀娟・安志紅・李禧承・林禔映・張希朱・全紫蓮・河在必・高橋美保(2020)『現代日本語基礎文法』韓国外国語大学知識出版コンテンツ院
- 于康・張超・徐愛紅・張佩霞・朴麗華・林璋・徐衛・母育新・段笑ye(日へんに化の下に十)・朴秀娟・徐微潔・金稀玉・金玉英・李沛・熊仁芳・黃毅燕・高山弘子・呂芳・裴麗・徐媛・彭玉全・于楊・曾嵐・徐蓮・李正政・樊曉萍・肥田栞奈・楊晶晶(2020)『日語偏誤与日語教学研究叢書 第6卷 日語副詞的偏誤研究:上』浙江工商大学出版社
- 于康・徐愛紅・朴秀娟・張超・高山弘子・徐微潔・黃毅燕・金玉英・樊曉萍・劉風榮・張善実・林璋・張佩霞・徐衛・陶魏青・金稀玉・熊仁芳・彭玉全・杉村泰・路浩宇・苞山武義・母育新・朴麗華・于楊・劉春紅・呂雷寧・林春・劉傑・向坂卓也(2021)『日語偏誤与日語教学研究叢書 第7卷 日語副詞的偏誤研究:中』浙江工商大学出版社
- 朴秀娟(2021)『副詞「まるで」が共起する述語について』『現代日本語研究』13、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室、pp.12-26.

<引用文献>

- 大関真理(1993)『日本語学習用教科書の副詞語彙』『言語文化と日本語教育』5、お茶の水女子大学日本言語文化学会、pp.23-34.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 朴秀娟	4. 巻 6
2. 論文標題 日本語教科書における副詞の扱いについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸大学留学生教育研究	6. 最初と最後の頁 23-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 朴秀娟	4. 巻 6
2. 論文標題 話し言葉における日本語学習者の副詞の使用に見られる特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語誤用と日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 154-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 朴秀娟	4. 巻 11
2. 論文標題 中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴 ストーリーテリングを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 朴秀娟	4. 巻 3
2. 論文標題 初級日本語教科書における副詞の導入実態について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸大学留学生教育研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011159	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 朴秀娟
2. 発表標題 日本語教育における「たくさん勉強してください」の使用をめぐる
3. 学会等名 AATJ 2020 Annual Spring Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朴秀娟
2. 発表標題 日本語学習者の副詞の使用状況
3. 学会等名 2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 朴秀娟
2. 発表標題 中級日本語学習者によるストーリーテリングに見られる副詞の特徴
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会第11回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 朴秀娟
2. 発表標題 初級日本語教育において導入される副詞の使用実態 中国人日本語学習者を例に
3. 学会等名 2017年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------